

13歳	【学齢期Ⅱ】 養護学校中等部へ入学	病気がちで通院が続き、学校にもあまり行けない状況が続いた	①教科書を使っての学習が始まり、勉強に興味を持つ	①中学校の教科書を手にして嬉しかった	↑	1	1	1	1
		②通院が多く、あまり学校へ行けない			↓				
		③学校へ行きたくなくなってきた		③教員の対応に限界を感じ、学校を辞めたいと思ってきました	↓				
15歳	【学齢期Ⅲ】 養護学校の高等部へ入学	学校が面白くなく、気が抜けた状態で生活していた			-				
		①高等部へ行っても、学校が面白くなかった			↓				
16歳	養護学校の女性教師から通信制高校の存在を知らされ、2年生5月に退学した		②養護学校女性教師から通信制高校を紹介される	②新しい展開に夢を持つことができた	↑	1			1
			③敵しいけれど、理解のあるA先生との出会い	③自分を理解してくれる先生と出会って、幸せだった	↑				1
17歳	通信制の高校へ入学	母の付き添い(トイレ介護等)で通学していた。障害をもつ子ので苦悩する母親を傷つけること、見捨てられることが怖いと感じていた。母親と本気で話し合うことを避けていた		④母親から見捨てられることが恐かったので、反抗さえできなかった	↓				
				④A先生の影響を強く受けてきたが、親が良いように思ってくれていなかった	↓				
18歳	周囲からどう見られているのか不安がつのり、外に向いていた気持ちがなえる	⑤自分をどのように見られているのか気がになり、外向きの気持ちが萎えた			↓				
				⑤他人の目が気になりだし、消極的な気持ちになった	↓				

30歳	同じ障害をもつ人が亡くなり、自分の死に対する不安を強く自覚させたが、両親には話せなかった	④同じ障害をもつ人が亡くなった							↓	④自分の死に対する不安が増大した							
32歳	A先生の転勤により自分が何をすればよいか分からなくなる。(自分の居場所に対する不安)	⑤A先生が転勤して、自分を見失った							↓	⑤A先生が目前からいなくなった							
33歳	車いすからの転落事故による骨折となる	⑥転落事故による骨折							↓	⑥外出することに對して両親の不安が強まった							
33歳	地域生活支援センターが開所され、関心を持った	⑦支援センターのスタッフと出会った							-	⑦自分を支援してくれるかなあと思った							
33歳	支援センタースタッフから誘いを受け、ピアカウンセリングを受け、ピアカウンセリングに参加することになった	⑧ピアカウンセリング講座の講師や仲間と出会った							↑	⑧講座を受けていく中で、自立や支援について考えるようになった				1			
33歳	支援費制度が始まり、移動介護や身体介護等を利用できるようになり、ヘルパーを利用するようになった	⑨ヘルパーを利用する有益さを実感した							↑	⑨ヘルパーを利用する有益さを実感した				1		1	
34歳	地域の障害者施策検討委員会へ就任した	⑩障害者施策検討委員への就任依頼がきた							↑	⑩地域での当事者リーダー的な役割を自覚してきた				1		1	
													3	5	5	9	9

これからの人生において、再度パワレス状態が訪れるとすれば、予想される出来事は何か	<ul style="list-style-type: none"> * 体調の変化 * 家族との関係悪化 * 周囲の人と疎遠になること
自分が幸せになっていくために、どのような力を付けていきたいと考えていますか。	<ul style="list-style-type: none"> * 家族や周囲の人に対し自分の意思を伝えられるようになること * 自分の体調や障害を受け入れること

調査者所見

☆ パワレスな状況

- * 本事例は過疎地域で、生まれながらにして障害をもっていたケースである。
- * 障害をもつ者への偏見から地域で育っていくことを拒否され、差別の現実や差別を受け家族の揺れる気持ちが分かり始めるころから、自分が地域に出ないことが家族の幸せとの想いを持つようになり、地元で表に出ることを自らも閉ざし息を潜めて生きていくことを覚悟した経験を持つ。
- * また、介護が無ければ生きていけない現実から家族との身体的・心理的なつながりに葛藤している。
- * 幼少時からの病名や余命の宣告、同じ障害のある人の死などで自分の命に対する不安を抱える。

☆ エンパワメントされた状況

- * 通信制高校に入り、解放教育に深い思いを持つ教師集団との出会いや障害をもつ仲間との出会いを契機に、閉ざしていた自分の思いや家族との関係について、問いかけられ揺り動かされ中で自らの体験を語る取り組みを始めた。
- * 自らの生活体験を語ることで自分の生きてきた歴史や家族との関係を検証し始め、障害者としての自分の在り方、生き方などについて自分の中で引っかかっていたものを問い直している。
- * その過程では差別意識や地域・人間関係の阻害から自分を解放する一歩をふみだしたが、一方で、家族との関係、自分の将来に向けての不安などパワレスな状況があることを改めて認識することになった。
- * 地域ではピアカウンセラー養成講座を受ける前後から、ピアサポート活動を実践しておりカウンセラーとしての力量をつけている。
- * 支援費制度が始まり、家族に依存していた移動を中心とした介護を公的なサービスとして確保できた。

事例概要と分析

本事例は、生まれながらにして「骨形成不全症」という障害をもち、山間の社会資源の乏しい地域で生活している女性を取り上げた。本人は、言語障害はなく、コミュニケーションは良好であるので、本人のみに対する聞き取りとなった。生後1ヶ月で「骨形成不全症」という診断がなされ、複数の病院に足を運んだが、3歳になつたときに不治の病気であることを知らされ、命の期限が近いことを知らされた。本人も6歳になつたときに、その事実を知り、漠然と死への不安を持つようになったという事例である。

本事例は、就学猶予の決定を受けたが、制度改正の波に乗って、養護学校に入学を認められたにも関わらず、友達もできない環境である「訪問教育」になり、訪問する教師と親の関係が悪く、中学生になると自らも教師との関係性が悪くなり、学校を辞めたいと思つてしまつてしまつた。養護学校の高等部には進学したが、ますます教師への不信感が強くなり、養護学校の中でも信頼できた女性教師から通信制の高校があることを知らされ、入学したことが田野倉さんの分岐点となり、地域生活支援センターとの出会いにより、さらにエンパワメントが進行した事例である。

1. パワレス・エンパワメントエピソードの件数

研究員が指摘したエピソードの総数は、41件であり、その内訳は次の通りである。

- ①パワレスになつたと判断したエピソードは、17件

- ②エンパワメントであると判断したエピソードは、13件
- ③パワレスになった側面とエンパワメントである側面を同時に含むと判断したエピソードは、0件
- ④分岐点ではあるが、パワレスともエンパワメントとも判断できないエピソードは、11件

2. パワレス状況

- ・ 6歳のときに、自分が立でないことに気付き、母親に問い掛けてみたが、表情が悲しく変化したので、聞いてはならないことだと自覚している。そして、両親の会話から命の期限があることを知り、死への恐怖感を持つようになった。
- ・ 就学猶予の決定がなされ、学校には行けないことになったが、姉の参観日等に外出する機会を多くして、周囲の理解を得ようとしたが、姉が偏見から虐められるようになり、母親も外出を躊躇するようになった。
- ・ 9歳のときから「訪問教育」が認められ、小学生になれたという喜びもあったが、10歳になり訪問する教師と両親の関係が悪くなり始め、勉強が嫌いになり、家に閉じこもることが増えた。
- ・ 中学部に入ると、骨折等で身体の問題が多く、通院が増えて学校に行けなくなった上に、担任に理解がなく、学校に行きたくない日々が続いていた。
- ・ 高等部に入ると、学校が嫌いになってきて、本格的に辞めてしまおうという決意を固めようとした。
- ・ 通信制の高校に入り、気持ちが前向きになりかけたが、スクーリングの際に母親と通学していることを考えると、母親に苦労を掛けているという自責の念に押しつぶされそうになり、母と真剣に話すことを避けていた。また、初めて自分がどのようになっているのかが気になり出し、パワレス状況になっていた。
- ・ 20歳になり、自分以外の障害をもつ人たちがどのように生きていっているのかを知り、家族との関係や自分の生い立ちなどを問い返しているうちに、自分の生き方に対して疑問を持ち始め、悩み苦しんでいた。
- ・ 24歳になり、心の拠りどころとなっている通信制の高校を卒業しなければならなくなったが、家から出る機会が無くなるのではないかと不安から、卒業を見送る決意をした。
- ・ 26歳のときに、両親が続いて入院することになり、生活面と介助面の不安が増大した。
- ・ 30歳のときに、県内に住む同じ障害をもつ障害者運動のリーダーが急死し、死に対する不安が大きくなったが、両親にも相談することができずに苦しんでいた。また、卒業後も、精神的な安定のために聴講生として通っていた通信制高校の信頼していた先生が転勤となり、自分の居場所を見失った。
- ・ 32歳のときに、車いすから転落し、骨折してしまったことを契機に、長期の自宅静養を余儀なくされ、両親が外出に対して不安を抱くようになり、気軽に散歩しなくなってきた。

3. エンパワメント状況

- ・ 幼児期においては、障害のない子ども達と同じように、母親との外出を楽しみにしていたり、学校に行けることに大きな喜びを感じているというように、障害をもっているが故のエンパワメントではなかった。
- ・ 養護学校の高等部に通学することが嫌になり、通信制の高校を紹介してもらったことが、環境因子の強化という観点からエンパワメントが進行したと考えられる。
- ・ 19歳のときに、通信制高校の合宿があり、自分より障害の重い人と出会い、強い刺激を受ける。自分の意思を親へ初めて強く伝え、通学させてもらえる許可を得た。
- ・ 22歳のときに、通信制高校の信頼できる先生や障害をもつ友人から多くのエネルギーを受け、自分の本音を話すことの大切さをしり、精神的に楽になった。
- ・ 26歳のときに、トイレや風呂の改造が終わり、自分が使えるトイレとお風呂ができ、環境因子が強化され、エンパワメントが進行した。
- ・ 33歳のときに、地域生活支援センターが創設され、強い関心をもった。そして、ピアカウンセリング養成講座に参加したことにより、講座に参加した人たちとの人間関係を深めることによって、地域社会での活動も顕著になってきた。

- ・ 支援費制度が始まったことによって、ヘルパーの有益さを知り、自らが制度を利用することによって、ピアカウンセラーとしての力量も増大してきたと感じられる。また、自分の体験談を他者に伝えることにより、自分の生き方を振り返りながら、前向きな人生を歩めるようになってきた。
 - ・ 34歳になり、地域の障害者施策検討委員に就任し、自分のことだけでなく、その地方で生活する障害をもつ人たちを考えて意見を言えるようになった。
4. エンパワメントタイプの変化
- ・ 生まれながらにして障害をもつ人たちの特徴と言えないが、19歳になるまでは、母親や教師に身体的にも精神的にも依存した人生を過ごしている。通信制高校の合宿を契機に、自分の意見を口にできるようになるが、なかなか自分のストレスを強化しようとする動きを見ることができない。
 - ・ 幼児期から成人するまでは、両親という強い環境因子によって、周りが考えたエンパワメントが進行してきたと考えられる
 - ・ 33歳になり、地域生活支援センターとの出会いとピアカウンセラー養成講座等の刺激により、本人にとって良い形のエンパワメントが進んでいくと感じられる。

5. まとめ

本事例は、本人の身体的な障害の大きさに加えて、山間の社会資源の乏しい地域で生まれたというハンディを背負ってはいるが、自分の周囲にある数少ない環境因子を上手に組み込んで、生きてこられた姿であった。骨形成不全という「骨折」というものを意識しておかなければならない状態は、消極的な生き方を余儀なくされそうではあるが、彼女の性格的な事柄もあり、信頼する人との出会いを契機に、積極的な人生へと変容していく。どのような環境に置かれていても、自らが積極的に関わり、多くの人間と出会うことによりエンパワメントしていく芽が伸びていくと思われる。田野倉さんが山間の過疎地ではなく、在宅サービスの整備された都会で生まれ育っていたら、もっと早い時点でエンパワメントしていたのではないかと思われる。

田野倉さんは、「まだまだエンパワメントなんか、していません」とよく話される。その理由は、生活面と介護面の不安から、両親から離れて一人暮らしができないところにあると聞いている。年寄いた両親に対して過度の介護を要求したり、大きな経済的負担を掛けることに関しては、多くの問題をばらばらでいると思われ、田野倉さんのように両親との精神的な距離感を持ち、両親を精神的に支えているという自覚があるとすれば、これも立派な自立生活と呼べるのではないだろうか。

○ エンパワメント事例8

氏名：西澤 千佳	年齢：37歳	<p>家族構成</p> <p>母(死亡) 父 兄</p> <p>本人</p>
障害名：筋ジストロフィー		
手帳・等級：身体障害者手帳1種1級		
居住地住所：〒 京都市〇〇区		
電話番号：075(573)0000		
住環境(バリアフリー関係)： 公団住宅の車イス対応住宅に単身入居し、ヘルパー派遣とデイサービスを利用している。就寝時に人工呼吸器を使用している。		

暦年齢	出来事(生育暦)	エンパワメントしていく契機となった事柄			状況の変動	エンパワメントモデル			エピソードの必然性		
		分岐点	心的状況	引き戻した力		I型 個人 因子 強化	II型 環境 因子 強化	III型 相互 関係 強化	本人 の 意図	他者 の 意図	他者 の 偶然
0歳	【就学前】 母親の母胎を助けるために8ヶ月の早産で生まれる。約3ヶ月間保育器に入り、若干の遅れはあるものの、やんちゃで良く動く子であった。	パワレスな状況になった事柄	・ある人との出会い・研修への参加 ・両親の病气や死・その他	・好きなのが出来た ・自立心が芽生えてきた ・その他	-	I型 個人 因子 強化	II型 環境 因子 強化	III型 相互 関係 強化	本人 の 意図	他者 の 意図	他者 の 偶然
7歳	【学齢期①】 小学校2年生の時、つまづくことが多くなり、集団登校についていけない。	①集団登校で登校できない。			↓						

13 歳	2年生になり、小学校の頃から本人をいじめていた同級生と同じクラスになったが、他の同級生が「やめろ」と言ってくれた。それをきっかけにして、小4から続いたいじめがなくなった。	③障害が理由でいじめのターゲットになりかける。	③同級生の一人が「やめろ」と言ってくれた。また、担任が「障害をもつから自分をダメだと思わない」と言ってくれる。	④いじめがきつかけで同級生と仲良くなる。	③同級生の「やめろ」という一言に本当に救われたと感じている。また、担任の一言が大きな励ましになった。	↑	1	1	1
14 歳	「やめろ」と言ってくれた同級生と仲良くなり、その子は遠回りしてまで一緒に通学するようになった。 学校側から「修学旅行には家族の同伴が必要」という要請があった。しかし、母親が病気であったため、参加を諦めようと思っていた。	⑤障害を理由に、学校行事に家族の同伴が求められる。	⑤残念だが仕方ないと諦めていた。	④仲の良い友達ができ嬉しかった。	⑤学校に「障害をもつ生徒をサポートする仕組み」が整っていない。	↓			
15 歳	クラスの中から「西澤が行かないなら私たちも行かない」という声が上がった。同級生は「気持ちまで障害者にならないで！」と言った。結局は、副担任が同伴して修学旅行に参加することになった。 【学齢期③】 皆と一緒に地域の普通高校に進学したかったが、設備や受け入れ状況のため、養護学校へ進学することとなった。	①思い反して、養護学校へ行くことになった。	⑥本人を支える気持ちのあるクラスと出会った。	⑥同級生の気持ちがあった。クラスの一人であることを実感した。	①養護学校しか選択肢がなかった。	↑	1	1	1

一人暮らしを始めた当初は数人のヘルパーを使って生活していたが、慣れるまでの半年ほどは、ほとんど外出しなかった。	⑨一人暮らしに慣れるまで、外出しない状況が続く。	⑨父親が心配してしばしば様子を見に来た。	-						
35歳	自立生活支援センター協議会主催の「ピアカウンセリング講座」に参加し、ピアカウンセリングについて学ぶ。 障害が進行し、検査・入院(血中CO2が67%)を経て、横になる時に人工呼吸器を装着するようになる。「いつ呼吸器が止まるか」という不安を常にもつようになる。 デイサービス以外の外出が減り、家の中で過ごすことが増えてきている。デイサービスはマンネリで詰まらないが、外出機会のため通っている。	⑩講座に参加し、多種多様の身体障害者と出会う。	⑩自分を客観視できるとなった。	↑			1	1	12
37歳	⑪障害が重度化し、行動が制限され、不安を抱えながら生活する。 ⑫障害の進行とともに外出が減る。	⑪動く前に考え、無理をしないように心がける。 ⑫不安と同時に、残された時間のことを考えるようになる。	⑪人工呼吸器を装着している人が、地域で安心して生活するだけの社会資源・サービスが整っていない。 ⑫利用者が選択できるほどの社会資源が整っていない。	↓					
			↓		4	4	6	10	12

これからの人生において、再度パワレス状態が訪れるとすれば、予想される出来事は何か	①さらに障害が進行し、人工呼吸器を常時装着するようになれば、行動がとてども制限されると思う。 ②いつ呼吸筋が停止するか不安がある。また、それまでにしておきたいこともある。 ③気管切開した時に、それでも地域で生活できるのか。 ④障害が進行するにつれ、ヘルパーの予定と自分の体調が合わないことが増えてくる。 ①まず、何よりも人を信じて素直になることが必要だと思う。また、その上で試しに意思表明してみることが大切であると思うが、そのパワレスが難しい。 ②事業所にヘルパーの人手が足りないので、「自分に合う人の派遣をお願いする」というようなことが言えない。しんどくても、つい遠慮がちになってしまう。 ③気の合うヘルパーや友人と一緒に、お菓子作りやパン作りなどをやってみたい。
自分が幸せになっていくために、どのような力を付けていきたいと考えますか。	

調査者所見

- ・普通学校においては、障害に対する配慮が不十分な場合も多い。
- ・逆に、養護学校においては「障害」に対する配慮はあるが、それ以外の部分に対する配慮が欠けていたように思われる。
- ・中学校時代の障害をもたない同級生との関わりが、本人の人生において非常に大きな体験となっているように感じた。
- ・ILプログラムへの参加が人生の大きな転機となっているように思う。
- ・進行性の障害に顕著であると思われるが、障害が重度化することにパワレス状況が拡大している。
- ・そして「障害の重度化がパワレス状況に直結している」という状況が、本人がもつ不安感の最も大きな原因の1つになっている。

事例概要と分析

本事例は、小学校低学年から進行性筋萎縮の症状が発症し、障害の進行に伴って高等学校より養護学校に通い、母親の死・父親との葛藤を経て、現在は、筋萎縮の症状は進行し続けているものの公団住宅における単身生活を営んでいるケースである。このケースでは、ライフヒストリーの中で、例えば「普通学校」対「養護学校」あるいは「人間関係や興味の広がり」対「障害による身体的制約の進行」といった相反するダイナミクスによる葛藤を読み取れる場面がいくつも見られる。つまり、中途障害に見られるような「障害をもたなかった自分」と「障害をもった自分」の間にある葛藤や、また環境や個人の「力」が高まっていく方向性と障害の進行による「それを引き戻す力」の葛藤を読み取ることができるのである。人生の分岐点という視点から見れば、もちろん障害の進行に大きな影響を受けているが、家族中心の対人関係から友人・当事者・支援者との出会いといった人間関係の広がりや転機となっている場面が多く見られ、また、公営住宅の優先入居・自立生活支援センターの関与やヘルパー派遣事業・デイサービスといった社会資源の活用が非常に大きな影響を与えていることが分かる。さらに、今後（と言っても近い将来）を考えると、障害の進行に伴う身体機能のさらなる低下とそのことに対する計り知れない不安について、「果たして福祉は力を持ち得るのか」という疑問を感じずにはいられない。

1. パワレス・エンパワメントエピソードの件数

研究員が指摘したエピソードの総数は32件であり、その内訳は次の通りである。

- ① パワレスになったと判断したエピソードは14件
- ② エンパワメントであると判断したエピソードは14件
- ③ パワレスになった側面とエンパワメントである側面を同時に含むと判断したエピソードは0件
- ④ 分岐点ではあるが、パワレスともエンパワメントとも判断できないエピソードは4件

2. パワレス状況

- ・小中学校時代には、普通学校に通っていたこともあり、学校や地域に「障害」に関する理解や配慮が不足していたことに起因するパワレス状況が見られる。これは、現在よりも普通学校における障害者の受け入れが一般的でなかったという時代背景も少なからず影響していると考えられる。
- ・西澤さんは高等学校から養護学校の高等部に進学するが、普通学校では「障害があること」がパワレス状況の要因となっていたのに対して、養護学校においては「これまで普通学校に通っていた」ということが本人の中でパワレス状況を際立たせる皮肉な結果となっている。
- ・成人してからすぐ母親が亡くなり、途端に父親との関係を中心とした家族関係が不調和となっている。障害がない子どもの場合と同じように西澤さんも家を出るが、その後も家族

の影響力が大きい(あるいは、そうでないと生活できない)状況が続いている。

- ・ 25歳以降は、外出に関する社会資源・人工呼吸器を装着した生活・社会資源の選択肢が少ない等、パワレス状況の原因として常に「症状の進行による障害の重度化」と「それに対応する社会資源の不足・不備」が原因となっている。
- ・ 西澤さんは20歳の時に運転免許を取得している。しかし、障害の重度化に伴い27歳の時に車を運転できなくなっている。そのことが象徴するように、進行性の障害によって「出来ていたことが出来なくなる」ということがパワレス状況を際立たせる結果となっている。

3. エンパワメント状況

- ・ 本事例において最初にエンパワメント状況が見られるのは11歳のときであり、進路について本人の意見とそれを聴取する環境が存在したという事実は見られるが、時代的背景を勘案すれば、本人の障害状況が「普通学校に通える程度」であったことも大きく影響していると考えられる。
- ・ 12歳から13歳に見られるエンパワメント状況は、いずれも担任・同級生の言動・行動に依拠している。しかしながら、そのエンパワメント状況は、本人がその状況にあることよって生じる対人関係のダイナミクスによって強化されている。
- ・ 20歳の時に車の免許を取得したことによりエンパワメントが見られるが、これは個人因子の強化がエンパワメントにつながった一例であると考えることができる。
- ・ 24歳のときに通信教育で社会福祉学を学び始めるが、その直後に「自立生活教育プログラム」に参加したことにより、本人の生活は明らかに単身生活・自立生活へと向かったことを読み取ることができる。
- ・ また、単身生活・自立生活へと向かうベクトルは、父親との不調和によって強化され、エンパワメント状況の進展における小さな原動力となっている。

4. エンパワメントタイプの変化

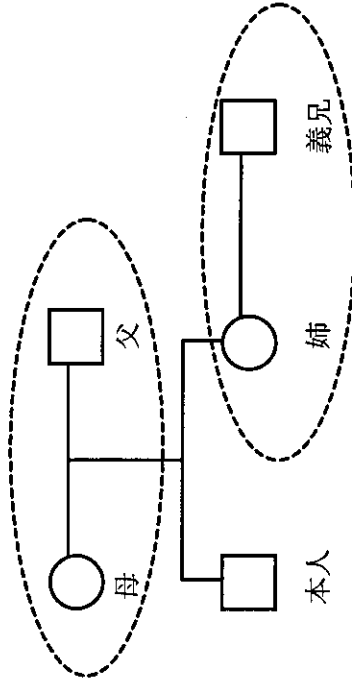
- ・ 11歳で普通学校または養護学校に進学することを選擇する際に最初のエンパワメント状況を迎えているが、先にも指摘した通り本人の障害状況が「普通学校に通える程度」であったため、結果としてIII型のタイプとなっている。
- ・ 12歳から15歳の時期に見られるエンパワメント状況のうちII型に分類されるものは、いずれも担任・同級生・近隣住民といった「人的環境」に依拠することが読み取れる。
- ・ 13歳から24歳にはI型に分類されるものが見られるが、その内訳は「対人関係の広がり」と「本人自身が力を付けたこと」にさらに分類することができる。
- ・ 24歳で「自立生活教育プログラム」と出会って以降、本人のエンパワメントはIII型となり、それが「自立生活支援センター」の関与という明確な形となってからは、その傾向が強化・発展していることを読み取ることができる。

5. まとめ

本事例は、先にも述べた通り「中途障害者のもつ葛藤」と「進行性障害をもつ人の葛藤」というダイナミクスの中で、エンパワメント状況が刻々と変化していく過程を如実に示している点で特徴づけることができるのではないだろうか。つまり、それは、障害のない人との比較によって(主として心理的な)パワレス状況は発生・強化する側面があることを示し、また、障害が重度であればパワレス状況に陥る危険性も高いという側面、あるいは一旦強化されたエンパワメント状況は障害の重度化によって再びパワレス状況に引き戻される脆さをもっているという側面を示しているのである。さらに言えば、軽度の障害をもつ人のみがエンパワメント状況を享受し、また障害の重度化によってそのエンパワメント状況が直ちに失われてしまいうのであれば、はたしてそれは本当のエンパワメントなのかという疑問を持たざるをえない。すなわち、本人のエンパワメントに関与する「環境」あるいはエンパワメントプログラムには、エンパワメント状況を再びパワレス状況へと後退させないような力強さと確かさが求められていると考えると考えられるのである。

○ エンパワメント事例9

氏名: 元木 彰雄	年齢: 23 歳	家族構成
障害名: 脳性マヒ		
手帳・等級: 身体障害 1 種 1 級		
居住地住所: 〒 京都市〇〇区		
電話番号: 075(822)0000		
住環境(バリアフリー関係) : 公園住宅に単身入居し、出入口には簡易スロープを設置している。自宅ではヘルパーを 利用し、学校では同級生の介助を受けることもある。福祉機器については、電動の特殊 尿器を使用し、尿排泄については単独でも行える。また、各種リモコンの活用や電灯に紐 をつけるなどして、特別なことがなければ、室内移動も含め単独の在宅は可能である。		



暦年齢	出来事(生育暦)	エンパワメントしていく契機となった事柄			状況の変動	エンパワメントモデル			エピソードの必然性		
		分岐点	心的状況	引き戻した力		I型 個人 因子 強化	II型 環境 因子 強化	III型 相互 関係 強化	本人 の 意図	他者 の 意図	他者 の 偶然
0 歳	【就学前①】 妊娠 29 週目で産まれる。未 熟児だったが、当時「未熟児 網膜症」の危険が言われて いたため、保育器の中で低 酸素状態になる。 出生1ヶ月後に専門病院を 受診し、脳性マヒと分かる。 週1回の割りで通院訓練(ボ イター法)を行なう。	パワレスな状況に なった事柄 ①低体重での出産 が障害の原因とな った。 ②市内から郊外へ 転居した。	ある人との出会 い・研修への参 加・両親の病氣 や死・その他	引き戻した力 ・両親の反対・社 会の偏見や差 別・その他 ①障害児医療が未 成熟であった。 ②母親が「近隣の 目」が気になった。	↓						

入学後は、送迎と常時待機が就学の条件であったため、2年生まで母親が送迎と待機、3年生からは送迎のみで、休み時間だけトイレ介助のために学校へ行った。	②1・2年時は母親が送迎と待機、3年時以降は送迎を担う。	②小3の姉が担任のサポートで校長に手紙を書く。	②普通学校であったこともあり、送迎と待機が就学の条件であった。	↓					
1・2年時の担任は若く楽しく、落ち着いて話す時間がなく、障害児学級の担任は年配で話まらないうちがゆっくりできてバランスが良かったと母親は話す。「できる科目は一緒に」という一般的な統合教育を受けていた。	③3年時は母親が送迎と待機、3年時以降は送迎を担う。	③3年時に姉の元担任が担任となり、常時待機が改善される。	③普通学級と障害児学級の担任には、一長一短があった。	↑					
4歳上の本人姉が自分の友達を休み時間に障級に連れてきたり、また、地域や自宅でも姉を交えて遊ぶなど、他子ども達との交流も活発であった。	④訓練を受けなければならぬ。		④姉が、本人と母親と一緒に訓練していることを羨むこともある。	↓					
4年生頃から、外でサッカーをする友達を見て「何で僕だけできないのか」と、自分の障害を認識するようになる。また、母親も「あなたみたいな子を産む積りはなかった」と、ケンカになることもあった。	⑤外で友達と遊ぶことができない。	⑤本人姉を通じて、学校や自宅で他児と遊ぶ。	⑤友達は、自宅には遊びに来たが、一緒に外に遊びに行くことはなかった。	↓					
毎日、2時間は自宅で母親と勉強した。	⑥毎日2時間の自宅学習が必要であった。		⑥学校だけでは教科学習が不十分だった。	↓					

12歳	<p>【学齢期②】 本人・母親とも普通学校を希望し、送迎と1日3回のトイレ介助を条件に普通学校進学が決まる。高校進学を目指していたので、普通クラスでの就学となった。</p>	<p>①母親による送迎とトイレ介助が就学の条件となった。</p>		<p>①「お母さんが邪魔」と思い始めた。</p>	<p>①学校サイドは「来て下さい」の一点張りであった。</p>	↓					
14歳	<p>地域の小学校からの持ち上がりであり、既に友達もいたが、校内での関わりはあっても、トイレ介助の問題もあり、外には誘ってもらえない状態が続いていた。</p>	<p>②友達同士で、外で遊ぶことができない。</p>	<p>②友達と外出したいと強く思うようになる。</p>	<p>②友達ではトイレ介助ができない。(あるいは頼めない)</p>	<p>②友達ではトイレ介助ができない。(あるいは頼めない)</p>	↓					
14歳	<p>また、ある日、母親がトイレ介助のために学校を訪れると、体育の後に男子は廊下で着替え、女子は教室で着替えていた。廊下に本人の姿はなく、教室を覗くと、女子達が着替えている中にぼつんと一人混じっていた。母親は「男子と見られていないのだ」と、可哀想に思ったと話している。</p>	<p>③同級生から「男子」として見てもらえない。</p>	<p>③母親からみれば、小学生から中学生になる過程で、子どもから男子になっていった。</p>	<p>③学校サイドに、この問題に関する気付きや配慮がなかった。</p>	<p>③学校サイドに、この問題に関する気付きや配慮がなかった。</p>	↓					
15歳	<p>【学齢期③】 推薦で、本人姉と同じ商業高校に入学する。商業科へは、勉強よりも実技、パソコンを家でも楽しめるようになれば…と思い「入れた」と母親が話している。</p>	<p>①進学する高校は、母親中心で決めている。</p>	<p>①母親は「本人に具体的な将来像はなかった」と話す。</p>	<p>①本人が具体的な将来像を持つためのサポートがない。</p>	<p>①本人が具体的な将来像を持つためのサポートがない。</p>	↓					

16歳	<p>今までのように地域からの持ち上がりではないので、クラスに馴染めるかどうか不安があった。馴染めるようになるまで半年かかった。</p> <p>送迎と校内の移動に学校側から「講師」が付けられて担当したが、この講師が最悪な人で、母親がケンカして辞めてもらった。</p> <p>学習面では、担当教員のバックアップで、取れる資格は全て取得した。</p> <p>また、友人との交友関係が深まり、本人宅に数人の同級生が泊まりにくるようになった。</p>	<p>②自分の問題について、本人が自分で意見できない。</p>	<p>②母親は本人に「自分で言うこと」を促した。</p>	<p>②他者を評価する目が育ってきた。</p>	<p>②学校側は、本人ではなく母親を相手に話をする。</p>	↑	1	
18歳	<p>【高等教育①】 一般入試により、私立大学の社会福祉学部に入學する。入學式には本人が「お母さんは付いて来なくていい」と言い、トイレについては「誰かに頼む」と言って一人で出かけた。また、大学サイドも「頼めば誰でも手伝ってくれますよ」と話した。</p>	<p>④自分の置かれている状況の認識や将来の展望を見出すことが難しい。</p>	<p>⑤障害者の研修旅行やILプログラムを通して当事者やスタッフと出会う。</p>	<p>③資格を取ること で自信が付いた。 ④「社会の中で、障害をもつ自分」を意識し始めた。 ⑤自分や自分の人生について考え始める。</p>	<p>⑤母親SHGから派生した当事者SHGは語まらなくなり辞めた。</p>	↑	1	

19歳	<p>通学は、たまたま中学校の同級生が同じ大学に入学しており、自宅から彼が車イスを押して一緒に登下校した。また、この頃から、学校での出来事を母親に話さなくなってきた。</p> <p>大学2年次より、大学近くのマンションにて一人暮らしを開始する。</p> <p>介護については、市の介護人派遣事業を活用するが、大学の友人を中心に介護人登録したため、友人であり同時に介護人であるという人間関係では苦労が多かった。</p> <p>また、夏季・春季の長期休暇には自宅に帰り、母親の全面介護を受ける。</p>	<p>②晴天時は友人と共に通学するが、雨天時は母親が送迎する。</p> <p>③母親が家探しに同行する。</p> <p>④自薦介護人に対して不具合があっても強く言えない。</p> <p>⑤長期休暇には一人暮らしを維持できない。</p>	<p>②中学時代の友人と同じ大学で再会する。</p> <p>③支援センター相談員と共にマンションを探す。</p>	<p>②通学時の送迎は善意であるため、雨天時まで頼めない。</p> <p>③全ての不動産屋・家主が障害者に対して理解を示すわけではない。</p> <p>④人的社会資源が、量的にも質的(種類)にも不足している。</p> <p>⑤ほぼ同級生(大学生)だけの介護体制に無理があった。</p>	<p>↑↑</p> <p>↑↑</p> <p>↑↑</p> <p>↑</p> <p>↑</p>	<p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p>	<p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p>	<p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p> <p>1</p>
21歳	<p>大学4年次より支援費制度がスタートし、介護体制を支援費制度にシフトする。</p>	<p>⑥支援センターが利用を支援する。</p>	<p>⑥支援センターが「しんどい」と本音を漏らす。</p>	<p>⑦介護体制は充分ではなかった。</p>	<p>↑</p>	<p>1</p>	<p>1</p>	<p>1</p>
22歳	<p>春期休暇の際、母親が思わず「ずっと家に居られるとしたらいい」と言ってしまったのをきっかけに、3月より自宅を出て、以後1ヶ月をマンションで過ごす。母親はショックを受けた反面で嬉しかったと話す。</p>	<p>⑦自立生活への意識がさらに高まる。</p>	<p>⑦母親が「しんどい」と本音を漏らす。</p>	<p>⑦介護体制は充分ではなかった。</p>	<p>↑</p>	<p>1</p>	<p>1</p>	<p>1</p>